



2014年(平成26年)

9月号(No. 832)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

高齢化が進む日本山岳会

当会の高齢化は会員減という深刻な状況を迎えている。当会の場合、会員減は収入減でもある。平成26年度通常総会でも話題に出たが、会員数の動向について、平成12年度より平成25年度を中心に報告する。

総務担当常務理事 高原三平(作図・永田弘太郎)

1・会員総数の推移(図1)

会員総数は、平成13年度の5995名がピークだった。その後、毎年100名前後の減少が続き、平成23年度に菌止めがかかった。平成25年度は5056名となっている。

平均年齢は、この14年間で10歳上昇した。会員減少の菌止めと並行して平均年齢もおよそ上昇がなかったが、昨年度は2歳上昇した。平均年齢はそのままと1年で1歳上がる。つまり計算上では会

2・年齢別会員数の推移(図2)

年齢別総数は、平成15年度では、60歳台が2339名と一番多く、平均年齢は62歳であった。それが10年後の平成25年度には、70歳台が1917名と最も多くなり、平均年齢は69歳となっている。ピークの山が、右に平行移動している。

注目すべきはその人数である。60歳台の会員が10年経ち70歳台になったとき422名減少している。また70歳台が80歳台になったとき343名減少している。30歳台から50歳台までがほぼ平行に推移しているのに比べ、大きな落ち込みである。これは何を意味しているのだろうか。

図3で平成7年度と平成25年度の年齢別構成を比較してみた。7年度では、40歳台から60歳台が会員の82.0%を占めている。その18年後の25年度では60歳台から80歳台が77.7%を占めるに至っている。会員の大半は昭和元年から昭和30年に生まれた世代である。世代交代がなされず、そのまま18年が経過している。

そしてこれから10年間に、おそ

目次

高齢化が進む日本山岳会	1
第8回三国学生交流登山を終えて	4
緑資源幹線林道地図(全8枚)寄贈に添えて	6
追悼 村井葵さんを悼む	9
一「山岳」第99年「委員会の活動報告」補遺	10
支部だより	11
越後支部/山梨支部/埼玉支部	
図書受入報告	14
図書紹介	15
Climbing&Medicine・64	17
会務報告	17
ルーム日誌	17
会員異動	17
INFORMATION	18
日本山岳会蔵資料紹介 No.14	19
編集後記	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時

らく60歳台や70歳台の大幅な減少が予知される。図2を例にとると、60歳台から70歳台で18%、70歳台から80歳台で32%、80歳台から90歳台で62%減少している。この数字を25年度の60歳台以上の会員にあてはめると、合計で1414名の減少となる。平成15年度から25年度までが920名の減少だったのに比べ、プラス500名近くの減少となる。

現状の会員数を維持するためには、現在の入会者にさらに10年間で500名以上入会者を増やす必要がある。

3・会員の種別の推移(図4)

次に会員の種別で見てもよう。総会で話題になった永年会員の増加について、通常会員の減少と比

図2 年齢別に見た10年間の会員数推移

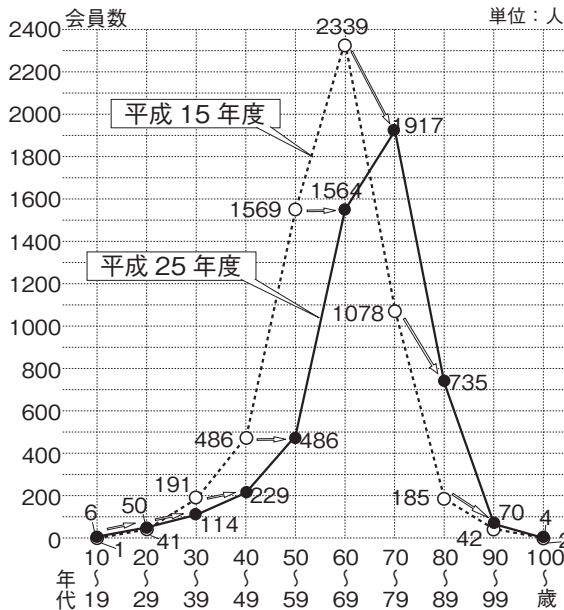


図1 会員総数と平均年齢の推移

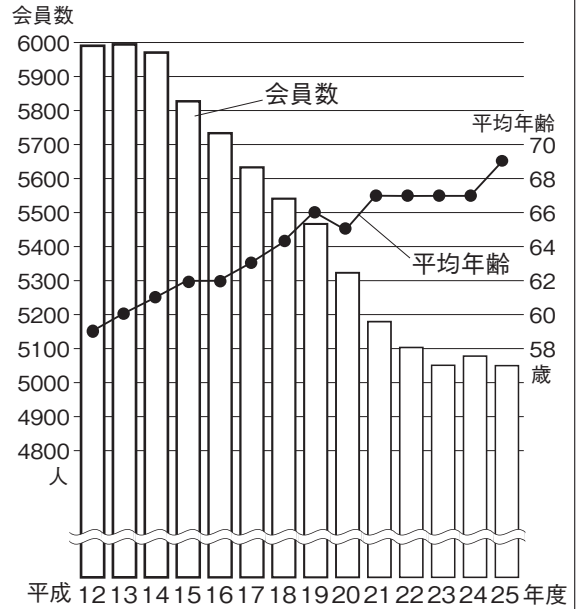
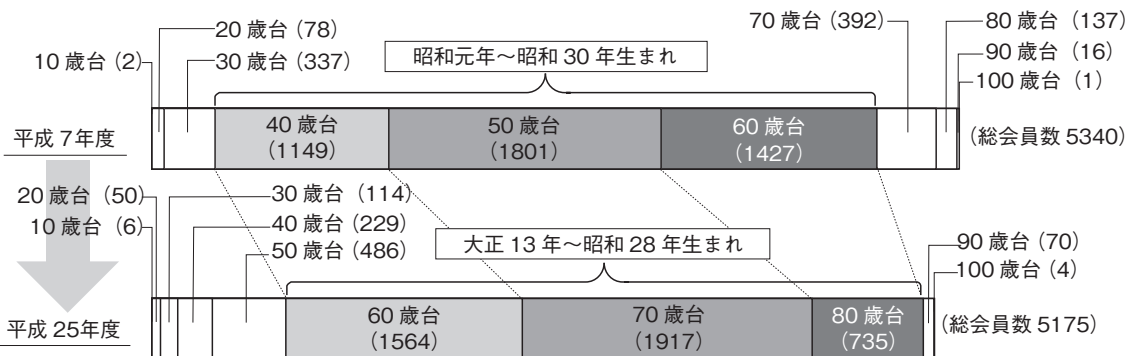


図3 年齢別会員数の割合の変化 () 内は会員数



会員動向 (平成12年度～25年度) 一覧表

年度	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18	平成19	平成20	平成21	平成22	平成23	平成24	平成25
	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
会 員 数	5990	5995	5970	5828	5735	5635	5543	5470	5317	5184	5109	5056	5083	5056
平均年齢	59	60	61	62	62	63	64	66	65	67	67	67	67	69
会員種別	名誉会員	38	35	17	29	28	26	26	22	18	17	18	17	14
	永年会員	73	81	85	100	106	111	138	166	189	240	257	284	326
	終身会員	38	143	157	154	161	165	162	153	140	130	122	113	106
	通常会員	5490	5484	5460	5289	5191	5095	4984	4887	4736	4560	4483	4409	4361
	青年会員			19	12	13	8	7	10	8	8	17	18	28
	夫婦会員	150	151	156	146	143	140	139	140	139	137	133	135	134
	団体会員	101	101	102	98	93	90	87	88	83	82	80	79	82
会員増	新入会員数 (復活会員)	188 (12)	187 (9)	187 (5)	188 (4)	133 (8)	146 (4)	141 (3)	107 (5)	90 (3)	99 (2)	156 (0)	174 (2)	236 (4)
	平均年齢	54	54	54	56	55	58	57	57	57	58	53	52	55
会員減	物故者	52	42	53	67	45	50	48	49	55	57	52	51	61
	退会者	76	102	117	138	139	131	139	137	146	132	144	141	127
	除籍者	45	50	66	63	50	70	54	44	50	36	41	41	61
	(合計)	173	194	236	268	234	251	241	230	251	225	237	233	249

較して取り上げた。永年会員とは、会に在籍して50年経過した会員で、会費が免除となる(会員のことである)。

永年会員は、平成12年度73名であつたが、平成25年度では326名と、4.5倍になっている。通常会員は5490名から4361名と、1129名減少している。永年会員の対象者は今後も増える予定である。会費収入(大部分が通常会員による)を主財源とする本会は、現状のままだと、収支の悪化が容易に予測できる。

4・会員数増減の推移(図5)

新入会員数は、平成12年度から平成15年度までは、毎年190名前後であつたが、その後、平成20年度の90名まで減少を続けた。しかし、平成21年度以降は増加し、平成24年度、25年度は200名を超えている。新入会員は増えたものの、結果として増減合計数で見ると、改善されているが、マイナスであることに変わりない。

会員減を見ると物故者および除籍者に大きな変化はないが、毎年250名近い会員減がある。ここ10年間の合計は約2400名だつ

図4 永年会員数と通常会員数の推移

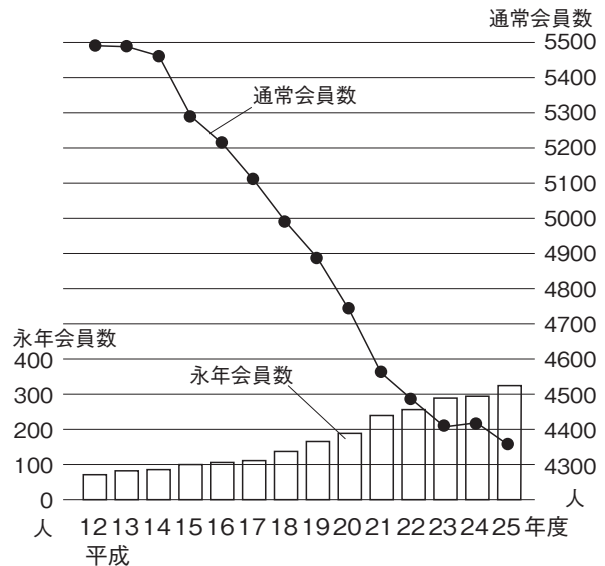
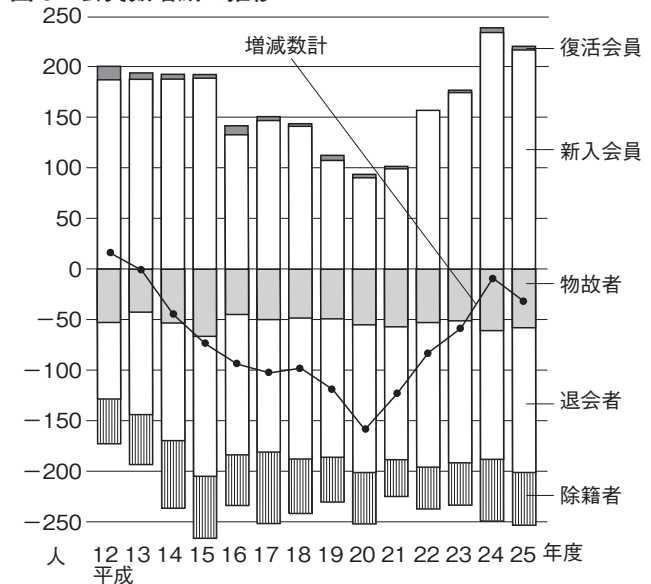


図5 会員数増減の推移



た。図2、図3で示したように、今後さらに減少数の増加が見込まれる。過去の10年は同世代の入れ替えでしかなかったが、今後は世代交代ができる層の入会が望まれる。期待できるデータとして、ここ数年で、40歳台は38名、30歳台は73名、20歳台は49名の増加があつたことを加えたい(図2)。

5・今後の予測

今後の予測を、財務的に検討し

てみる。

確実なのは永年会員の増加、すなわち会費免除会員の増加である。今後の永年会員の予定者数は平成26年度から平成38年度までの12年間で586名の増加となる(毎年平均で約49名)。会費免除会員数は現在の405名より平成38年度には924名となる。これは会費免除会員の全会員数に占める比率を、8%から18%に押し上げることとなる(会員数は平成25年現在

で、死亡等による減少は考慮していない)。

今後の収支健全化のためには、より一層のドラスティックな戦略が要求されている。

(集計について)

・集計は年度末の人数とするが、平均年齢および年代別集計は年度内の不特定時点とした。

・会員種別の計が総計と異なるのは、永年、終身、名誉会員の重複による。

Report

第8回三国学生交流登山を終えて

YOUTH CLUB 学生部部长 中山茂樹

《報告》

第8回目の日中韓三国学生交流登山が、8月6日～12日の期間、韓国で開かれた。

日本からはスタッフ4名、学生10名が参加した。中韓からもほぼ同数の参加があり総勢42名で、1週間の岩登り三昧の日々を楽しみ、三国の交流を深めることができた。

北漢山(ブッカンサン)国立公園



漢陽大学へ表敬訪問・歓迎晩餐会

にある国立公園エコ・ラーニング・センターの宿舎に投宿。

エコ・ラーニング・センターは実に充実した施設で、古い山道具などをはじめ数多くの展示物を収蔵する博物館や研究・研修施設、宿泊施設と給食施設も整っている。まずはこの岩登り三昧の1週間の様子を簡単に紹介する。

初日は韓国入国、全員集合、宿舎に入ったのがすでに夕刻で歓迎会のみ。2日目は岩登りの基本スキルの確認と共有と練習。3日目は仙人峰(ソニンボン)でメンバーの力量のチェックのためにやや簡単なマルチルートに登った。そして4日目が今回のメインイベントとも言える日で、仁寿峰(インスボン)で4～6ピッチのマルチピッチに挑戦した。

仁寿峰は山全体が花崗岩の岩山で、高さこそ811mとそれほど高くはないが、その基部から全面岩肌が出ていて、まさに屹立している。要するに山ひとつ丸ごと登攀対象であり、その威容は遠くか



頂上より60mの大懸垂

らもよく望見できる。

力量の揃ったメンバーを選んで韓国スタッフがパーティ分けをし、6つに分かれて6つのルートをそれぞれ登った。

天気も上々で、皆大変楽しく、スケールの大きなマルチピッチ・ルートを抜群の高度感の中で満喫できた。

翌5日目はソウル市内の公園に設置されている大きな人工壁でクライミング・コンペを行なった。各国から3名ずつが個人戦に出場し、日本チームは1位、2位、4位に入った。この日はコンペを終了して帰途につくころ、夕立のようにはばらく雨が降った。

6日目は学生同士で市内観光。一部は登り足りず昨日とは別の人工壁にクライミングに出かけた。

初日や最終日は歓送迎会でおおいに歓待されたわけだが、ほかの日の夜も、例えば遠くの支部から

も支部長が6名ほどお越しになって我々を歓迎して下さったり、また漢陽(Hanyang)大学理事長から漢陽大学にお招きをいただき、同大学の学生との交流会、晩餐会の機会を持つことができた。

今回の交流登山を主催いただいた韓国山岳会に対して、この紙面を借りて改めて深く御礼申し上げる。中日の山にはない韓国の山の特徴(スケールの大きな岩山の登攀が、首都ソウルから日帰りできること)を見事に活かした素晴らしいプログラムであった。

また、毎日集まってくださる登攀リーダーたちの人数の多さに頭が下がる思いであった。韓国を代表するプロクライマーをはじめ毎日10人は下らない皆さんにお世話になった。それというのも、まず第一に一流のクライマーが皆、韓国山岳会に加入されているからである。その上に生業を休んでこれほど多くの皆さんが、毎日お手伝いに来て下さることに感銘を受けた次第である。

ひるがえって日本山岳会について考えたとき、日本開催ではこんなことは実現できないだろうと、つくづく当会の登山界における影

響力の弱さを感じるのであった。

さはさりながら、学生に目を向けられ、日本チームの学生が岩登りのこのプログラムに対して真に優秀であった。参加を決めて以来一ヶ月半ほどの間、天候に恵まれず全員での合宿こそできず仕舞であつたが、各自で岩登りに焦点を絞った練習に励み、トップのレベルもボトムのレベルも大変優秀であつた。スタッフも4名の内の2名は今回の日本チームの中でトップクラスの登攀能力を持ち、学生を良くリードしてくれた。その内の一人は毎週最低2回はクライミングジムに通っているし、もう一人は今年社会人になつたばかりのほとんど現役クライマーであるから当然の話ではあるが、このことが当会に集まってくる現役学生に大変良い刺激を与え、学生部の活発な活動を支えている一端である。

見方を裏返せば昨年までの学生部の活動を良く理解、納得し、さらにコミットしてくれておればこそ、今年のこのチームにスタッフとして参加を希望する新青年部のメンバーがいてくれるわけである。ともあれ、韓国スタッフのリーダーシップと、日中韓のスタッフ、

学生メンバー全員のメンバーシップは良好で、岩登りというリスクの高いプログラムを、事故なく貫徹できたことを、参加者はもちろんご支援をいただいた多くの皆さんに感謝し、大変うれしく思う。

《展望》

来年は第9回で中国開催である。この回をもつて、日中韓三国で議定書を交わして了解したこの事業は一応の終了となる。

その後、この事業はどのように扱われるべきか、学生部の立場として展望を述べておきたい。

私自身はこの事業（これまで8回開催）の後半に携わり、実際には4回分（第4・6・7・8回）のみ学生と共に実際のプログラムに参加したのであるが、次のように評価する。

日本山岳会が正式行事として海外の山岳団体と交流する唯一の行事であり、重要な役割を果たすものである。

学生部はここ数年活発に活動している。また、単独で技術指導や山行体験の伝承ができない大学がますます増える中で、当会学生部の役割はこれまで以上に責任あるものになっている。このような環

境の中で、この事業を通して全国の大学から学生が集まり、共同で具体的な登山に取り組むことは大変有意義であり、今後も継続する価値は高い。

一方で日本開催においては多額の費用がかかる。運営資金が決して潤沢にあるわけではない状況で費用対効果を良く吟味しなければならぬことも、今後この事業を継続するならば重要なポイントとなってくる。

本誌の今年5月号にも触れたが、昨今の大学山岳部は総体的に見てかなり衰退しており、これまでの様相とは違つて来ている。今どきの山をやる学生は、はじめから自分の大学に依存しては山に登れないので、当会の個人会員になつて学生部の雪上訓練に参加したり、青年部との合同主催の合宿に参加しており、学生の当会への取り組みはすっかり変わったものになっている。今年学生部で活動している学生の内10名は個人会員である。この事業を行なう主体としても学生個人会員が大きく関与しており、新入会員獲得にも寄与していると評価できる。

以上の評価を踏まえ、今後も三

国学生交流登山を継続的に開催することを望むものである。

参加者リスト

スタッフ

中山茂樹(団長)

大島 崇／杉原一樹／村越 稔

学生

森本悠介(京都大学)／井上由樹子(武蔵野大学)／小澤佑介(名古屋工業大学)／生井武龍(神奈川大学)／井藤将大(法政大学)／三田村ウルズラ(名古屋外国語大学)／石井良樹(法政大学)／真下孝典(青山学院大学)／坂部信一郎(南山大学)／堀内志高(神奈川大学)

行動記録

DAY1 8/6 (水)	19:00	歓迎晩餐会
DAY2 8/7 (木)	09:00	ELIの隣の登山博物館を見学
DAY3 8/8 (金)	09:30 16:30	スニンボンにて2~3Pのクライミング 漢陽大学へ表敬訪問・歓迎晩餐会
DAY4 8/9 (土)	15:30 18:00	頂上より60mの大懸垂 室内アイスクライミングジム見学
DAY5 8/10 (日)	14:00	クライミング・コンペティション
DAY6 8/11 (月)	09:30	ソウル市内探訪

map information

緑資源幹線林道地図(全8枚)寄贈に添えて

毎日新聞社終身名誉職員 会員番号9634 滑志田隆

平成20年の国会決議によって廃止決定され、同25年度末に残工事完了と共に事業終結した「緑資源幹線林道全国地図」(縮尺50万分の一、全8枚)について、独立行政法人森林総合研究所に資料請求し、自然保護委員会を経由して図書室に寄贈した。筆者は環境・人口問題担当の新聞記者として永年にわたり山岳地域の開発を注視してきたが、緑資源幹線林道事業の終了は環境保全史上の大きなエポックと受け止めている。同事業の歩みの全容を記録した地図が、我が国の国土利用計画と山岳地域の自然景観、生物多様性保全との関係史を検証する基礎資料として、今後日本山岳会において活用されることを望みたい。

〈大規模林道事業の沿革〉

山岳地域の林野を伐開し、計2000 kmに及ぶ舗装車道ネットワークを構築しようとした緑資源幹線林道事業。それは、「国土利用の抜本的再編成を図り、各地域の特

性に応じて国土を有効に活用することを目指した「新全国総合開発計画」(昭和44年5月閣議決定)の一環として農林水産省によって計画立案された。正式には「大規模林業圏開発林道構想」と言う。

事業主体は森林開発公団(平成11年緑資源公団と改名)であり、立案当初から「大規模林道」の名称で呼ばれ、平成15年10月の緑資源機構発足に伴い、緑資源幹線林道の名称に変更された。

事業の対象地域としては北海道から九州まで、7つの山間部圏域(地図作成は8枚構成)が指定された。計32路線、延長2025 kmの事業予算として9413億円が見積もられ、昭和48年に事業着手。対象とする森林面積は約30万ha、森林蓄積量は同年現在で2987万m³と推計された。

当時の開発計画書によれば、道路の性格は「事業による森林資源の開発効果が著しく、かつ広域にわたるものであることから、通常の林道より高規格で公道との関連

性が強いもの」と規定される。農林水産省告示により「2車線、全幅員7m、舗装(セメントまたはアスファルト)」との基本構造が定められ、詳細な構造基準については、林野庁長官と建設省道路局長との間に覚書が作成された。当時、2車線舗装を標準とした林道は前例がなく、また林道規程とは別に特別な構造規程が定められたことも異例だった。

「国土の均衡ある発展」のために過疎地の開発を優先するのか、山岳地域の景観保全を重視するのか。この道路計画は立案当初から全国各地で自然保護上の論議を巻き起こし、一部は計画変更や工事中止を余儀なくされたことは各地の新聞報道などで周知されているとおりであり、当初計画の構想どおりで完成したのは5路線のみだった。

〈地方自治体との関係〉

事業の実施方式は、施工地域が政令で指定され、農林水産大臣が基本計画を定め、公団(機構)はそれに基づいて実施計画を策定した。事業資金は3分の2を基本に国庫補助金を当該事業年度に公団(機構)が受け入れ、残りは大蔵省資金

運用部から長期借り入れによって賄う。借入金の返済は関係道県の負担金と受益者賦課金を償還財源として行なうこととされた。なお、平成13年に財政投融资制度が改革された以降は、財政融資に加えて公団(機構)が独自に発行する緑資源債券により調達されることになった。

事業の実施7地域とは、北海道、北上山地、最上・会津山地、飛騨山地、中国山地、四国西南山地、および祖母・稚葉・五木地域であり、対象となる市町村としては昭和48年度から平成6年度に至るまでに195市町村を指定。関係道県はじめ地方自治体と特に強い関わりを維持しながら順次、建設されていったことが、緑資源幹線林道事業の大きな特徴である。

具体的には、実施計画の策定または計画変更は、関係自治体の長との綿密な協議によって開始された。国の事業であり公団(機構)が事業主体であるにもかかわらず、該当する道県は毎年度の事業計画において地元市町村の意見を聴取した上で、林野庁に事業費の要求を行なうという方式が採用された。公団(機構)はこのようなプロセス

において決定された業務計画」に基づき事業を実施した。地元自治体との綿密な協議を前提とする方式は、幹線林道の建設計画が地元関係者や保護団体などに十分に説明され、関連する諸議論の機会を多く持たせる効果があった。

さらに、用地補償事務を関係の自治体に委託して実行したことも緑資源幹線林道事業の特徴のひとつに数えられる。公道と公道とを連結する林道であるため、一般林道と比べて格段に公共性の高いことが理由となつて、用地取得の際に民有林に対する補償費が例外的補助対象として認められた。実際の補償交渉においては、公団（機構）は関係道県に事務を委託し、道県は地元の市町村に再委託して実施した。

■ 綠資源幹線林道位置図 ■



〈公団方式林道開発の終焉〉

公団方式による大規模林道建設事業は、平成19年に官製談合事件を摘発された緑資源機構の解散と共に廃止決定され、残された林道保全管理業務（既設道移管円滑化事業）は平成24、25年度に7区間14・2kmの移管完了によつて、受益者賦課金等の徴収事務を除いてすべての事業を終了した。ここで、自然保護関連団体と半世紀にわたる激論を戦わせた公団方式林道事業について、総括的に述べておく。

森林開発公団およびその後の緑資源公団、緑資源機構の林道事業は、昭和31年度に着手し、昭和35年度に完成した熊野・剣山地域林道事業（36路線・延長322km、事業費約34億円）、昭和34年度に着手し、昭和42年度に完成した関連林道事業（51路線・延長465km、事業費約84億円）、昭和40年度に着手し、平成2年度に完成した特定森林地域開発林道事業（いわゆるスーパール林道・23路線・延長1179km、事業費約1018億円）、昭和48年度に着手し、平成19年度まで実施した大規模林業圏開発林道事業（平成16年度から緑資源幹線林道事業と改称・32路線）を実施

してきた。

なお、大規模林業圏開発林道事業は、平成13年12月に閣議決定された「特殊法人等整理合理化計画」に基づく見直しを行なうため、平成14年設置の「大規模林道事業の整備のあり方検討委員会」による検討結果（平成16年2月）を反映して、計画区間の幅員縮小、延長縮減等の変更を余儀なくされた。

その後、平成19年度末に緑資源機構が廃止されたため、緑資源幹線林道事業は、完成延長1319km、事業費約5899億円の段階で取り止めとなり、残工事区間については道県の判断により道県が事業を継承できることとなった。また、着手済みで未完成の緑資源幹線林道を関係市町村等へ移管するため、森林総合研究所森林農地センターが既設道移管円滑化事業を実施することとなった。

昭和31年度から平成19年度までに実施した林道の総延長は、約3285km、事業費約7037億円。山岳道路に適した工法が検討される一方、国民の自然環境保全に対する要請の高まりによつて、南アルプス林道の北沢峠付近などで工事が一時中断される経緯もあった。

昭和50年代後半からは環境との調和を目指した新技術・新工法に積極的に取り組まざるを得なくなり、保全対象となる動植物等が確認された場合には必要な対策を実施することとし、特に稀少猛禽類の生息が確認された場合には、専門家の意見を聞き工事実施時期を検討するなどの対応措置を講じるようになった。また、自然保護運動の圧力によつて平成7年度から環境調査を進めていた真室川・小国線朝日・小国区間については、平成11年度に期中評価結果を反映し、一部区間を中止するなど大幅な計画変更を行なうことになった。

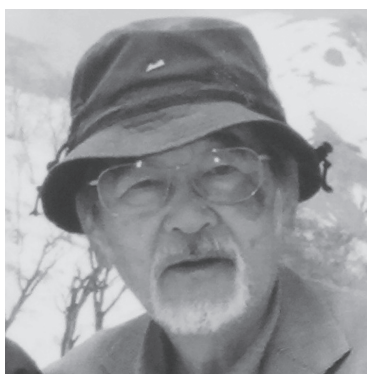
このような反省と教訓を踏まえて、公団機構は調査・測量・設計の段階から環境に配慮すると共に、景観配慮のための補強土壁、在来種木本類を用いた法面緑化、小動物のためのスロープ付側溝等の環境対策工法を採用するなど、工事実施の基本姿勢に改善も見られた。このような姿勢が森林土木技術を向上させる観点から評価されたことも付記しておかなければならないだろう。

平成7年度から18年度までに5件の環境対策工法が関連分野研究

団体から表彰されたという。また、平成20年度から独立行政法人森林総合研究所の名において実施された既設道移管円滑化事業においては「生態系および景観に配慮した工法」の可能性が追求され、必要な環境保全対策等を行ないつつ保全工事が実施されたと説明されている。

森林総合研究所の公共事業部門である森林農地整備センターは、平成25年度末で林道保全管理業務を終了することとなったが、自然保護運動から得た教訓や蓄積された経験と技術が今後の森林土木技術のレベルアップに役立つよう、森林開発・道路建設セクターに対して一層の工夫を求めていくことが日本山岳会等の責務であろう。

また、財投借入金等の償還財源となる賦課金等については、各年度の事業実施後21年の分割徴収であり、特定森林地域開発林道事業に関しては平成23年度にすべての徴収が完了したものの、緑資源幹線林道分に関しては平成44年度に完了予定となっている。賦課金等の確実な徴収、国庫への償還に努めることが森林農地整備センターに求められる。



村井 葵(むらい・あおい) 会員No.6285

1936年11月 村井家の長男として大阪に生まれる。中学時代から登山に興味。高校は横浜の関東学園。1957年 早稲田大学商学部入学、山岳部入部。積雪期は、剣、穂高、白馬、富士山などに登る。1961年 東京トップ(株)入社。以後いくつかのスポーツ用品業界に迎えられ、主に登山用具の企画、開発を手掛ける。会社を創った時期もあった。1962年 早大ベルー・アンデス登山隊(吉川尚郎)に加わりアルパマヨ(5947m)などに登る。1965年 末路のローツェ・シャール(8383m)登頂を目指す早大登山隊(吉川隊長)に参加。7100m地点で滑落した成川隊員に付き添ってピバーク。約2週間後、収容先の第2キャンプで意識不明に。1997年7月 当会理事就任(2期)。会報「山」担当。

*著書に『幻想のヒマラヤ』(1969年)、『岩登り入門』(1975年)、『登山用具入門』(1979年)、『高峰への挑戦』(同)、『アマの首飾り』(1993年・共著)など。

村井葵さんを悼む

成川隆顕

7月5日、入院先の東大阪市の病院で死去。享年77だった。1997年7月から2001年6月まで4年間、当会報「山」の編集人を務めた。ここ数年は、肺気腫との長くて厳しい闘いだった。

最後に『山』に原稿を寄せたのは12年1月号、8000号を記念する歴代編集者の回顧ページである。『編集は、プラス思考で』のタイトル

追悼 OBITUARY



で、「会報づくりに当たっては若者に創造する能力、冒険するチャレンジ精神を培養するよう努めました」と書いてある。氣力を奮い起たせたかったのだらう「これらの若者はなにを目標にすべきか大いに議論すべきでしょう」と煽つてもいる。

村井は1957年、早稲田大学に入つて山岳部に入部した。体は小さいが高校時代は陸上競技部に所属して、長距離の選手。心臓が強くて足が速かった。体重

より重い荷物を担いで弱氣を見せなかった。

マナスルが日本隊によって初登頂され、穂高を舞台にした小説『氷壁』が人気を呼んで、登山ブームが沸き起こっていた。

当時山岳部では強さと早さが求められ、わたしも一年下の村井もより高くより困難な山登りを目指して厳しい練磨を自らに課していた。

登山は登攀意欲と安全への配慮の接点に成立する――。冬の山を甘く見ていたつもりはないのだが、わたしたちの学生時代、早稲田は明神岳と富士山の雪崩遭難で8人の仲間を失った。そのことが、同時代の部員の結束を強めた。わたしも村井も山の仲間から離れられなくなり、登山が単なる趣味ではなくなった。

卒業して村井は登山用具業界に身を置き、ヒマラヤ8000m峰への夢を持ち続けた。「チャレンジ精神を」という元編集者からの『檄』は、ひたすらに登山と向き合った若き日の村井からのメッセージと受け取ってほしい。

一緒に出掛けたヒマラヤへの挑戦、ローツェ・シャール登山は、わ

たしの転落事故がすべてを狂わせ失敗に終わった。急峻なルンゼで繰り広げられた困難な救出作業、極度の疲労。酸素の薄い高所で意識を失った村井。

記憶にない1ヶ月を過ごした村井には、視力など神経系統に後遺症が残った。深刻なダメージを与えてしまった。

彼は素人なりに高山病を勉強した。まるで回復の度合いを確かめるかのようにキリマンジャロやアルプスを登り、ヒマラヤをトレッキングした。わたしに対して恨み言はひと言も言わなかった。「山岳部で生かされてきた僕はとても幸せだったと思います」と書き残した村井は優しい。

なぜ村井が肺気腫を発症したか。わたしには判らないが、なぜか周辺に多い。かつて父親が住んでいた大阪に帰り、京子夫人ら家族に支えられて闘ったが力尽きた。

わたしのなかで村井の死は、なにと重く、心が痛む。滑落事故さえ起こさなければ、という思いは消えることがない。

いまはただ、村井よ安らかに眠れ、と祈るばかりである。

Library

『山岳』第百九年「委員会の活動報告」補遺——
自然保護委員会

大規模開発の時代は遠く過ぎ去り、これまで考えてもなかったような新しい課題が山岳地での自然保護のテーマになっている。鹿問題しかり、トレラン問題しかり。その中で今後、自然保護委員会として何を活動の中心に置くべきなのか、鋭意検討を進めている。

しかし、足元を振り返ると委員の減少と高齢化により委員会として活発な活動がやりにくくなっているのも事実である。そこで2013年度は委員の人員拡充を進める年になった。新任の委員は5名、河川工学の専門家あり、世界を飛び回っている動物学者あり、ITに精通した若手あり。いずれも自然保護活動に造詣が深い人材である。バラエティに富んだ人材が委員会に加わって、活発な活動を行なうための基盤はできたと思う。

もちろん、『木の目草の芽』の編集発行、山岳写真データベースほか、片手間ではできない大変な作業を手弁当でやっている現委員の力があってこそその委員会の活動で

ある。次年度はそこに新しい力を加えて次のステップに進んでいきたい。

なお、2013年4月から14年3月には次のような活動が行なわれた。

自然保護全国集会の開催

7月6日と7日の2日間、「立山・弥陀ヶ原の自然に学ぶ」をテーマに開催。当日は110名ほどの自然保護に関心を持つ全国の会員や自然保護関係者が富山市の立山国際ホテルに集まった。1日目は地元市長や日本山岳会副会長の挨拶に続いて、立山カルデラ砂防博物館の飯田肇氏が「立山連峰の積雪と氷河」と題して「日本初の現存する氷河」をはじめとする立山周辺の積雪に関する報告をし、続いて環境省自然公園指導員の佐藤武彦氏が立山から弥陀ヶ原周辺のあれこれを「弥陀ヶ原 自然と歴史の今昔」と題して面白おかしく解説した。

さらに短い休憩をはさんで「湿原の自然と保護」、「ライチョウの

生態と保護」、「信仰登山について」、「持続可能な自然環境の管理について」の4つのテーマ、5つの分科会に分かれてグループ討議を行ない、立山や弥陀ヶ原をはじめとする山の環境保全や民俗について考えを深めることができた。

2日目は弥陀ヶ原、室堂、県立立山博物館と立山カルデラ砂防博物館の3コースに分かれてフィールド・スタディを行なった。あいにく雨天ではあったが、前日の講演や討議で聞いたことを現場で確認し、さらに理解を深められたと思う。

機関紙『木の目草の芽』の発行

隔月刊で104〜109号を発行。104号から106号までは立山で行なわれた自然保護全国集会の案内と報告が中心テーマである。107号はヒマラヤ登山とマングローブの森づくりに人生をさ

さげてきた向後元彦氏の回顧と、第14回ライチョウ会議山梨大会の報告。108号は静岡県自然保護課の山崎由晴氏による南アルプス北部の鹿による食害の現状報告と、北アルプス・ブロードバンド・ネットワークの紹介など。109号は世界文化遺産となった富士山の利用施策の現状と対策について横

浜国立大学の加藤峰夫氏による報告と、東海支部・鬼頭良吉会員による猿投の森における野生動物調査の報告などが掲載された。

山岳写真データベースの作成

高山植生の昔の記録を保存するため、過去に撮影した写真を集めた上で整理・公開し、新旧写真の比較から高山帯の植生変化の実態を明らかにするデータベース。写真や位置情報などのデータ募集や整理を進めるため、委員会内部だけでなく山岳会内部や他山岳団体に対しても協力要請を行なっている。日本山岳会の外からの利用も

あり、公益社団法人の公益事業として今後さらに力を入れていくべきテーマであるに違いない。

山岳団体自然環境連絡会開催

日本山岳協会、東京都山岳連盟、日本勤労者山岳連盟、H A T T J、山のエコー、日本山岳ガイド協会、日本山岳会の自然保護担当者が月1回、情報交換を行なっている。会議には外部の自然保護関係者も出席し、環境省国立公園課の課長・職員との意見交換や、伊那市による南アルプスの「国立公園50周年」に向けた取り組みの紹介も行なわれた。

なお、連絡会の中では個別のテーマとして、トレランや富士山の入山料問題などのテーマが取り上げられている。

その他

第1回アジア国立公園会議に渡邊委員が出席した。(近藤雅幸)
この自然保護委員会の活動報告が、編集作業上の手違いにより、『山岳』第百九号から欠落してしまいました。会員の皆様方、並びに自然保護委員会各位に大変ご迷惑をおかけいたしました。お詫び申し上げます。『山岳』編集委員会委員長／担当理事 節田重節

支部

だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

越後支部

第57回高頭祭と高頭翁墓参

越後支部恒例の第57回高頭祭は、7月25日弥彦山大平園地高頭仁兵衛翁寿像碑前で盛大に開催された。来賓として日本山岳会森武昭会長と高原三平常務理事をお招きし、さらに昨年に引き続き日本山岳協会神崎忠男会長(日本山岳会評議



寿像碑をバックに記念撮影(写真1)

員)も主宰されている「軽登山靴倶楽部」のメンバー二十数人と共に駆けつけていただいた。越後支部会員および関係者を含め約80人という過去最高の参加者が集まった。14時30分桐生恒治事務局長の開式宣言が始まり、橋本正巳支部長が「まだ梅雨明けしておらず昨日まで雨天で心配したが、本日は打って変わって晴天となり熱中症にならないように注意していただきたい。」と、参加者を気遣うほど太陽の日差しがジリジリと照り付け急激に暑くなったが、大平園地では日本海からの涼風も吹くため、絶好の式典日和であった。

橋本支部長から今年度の来賓紹介をしていたのだが、「日本登山界の二大巨頭である日本山岳会会長と日本山岳協会会長をお迎えできたことは、高頭翁のなせる人徳であり越後支部として非常に名誉なこと感謝を申し上げます。」

と開会の挨拶を述べられた。

まず平田大六支部名誉会員による神事で始まる。毎年恒例の本職神官並みお祓いの祝詞をあげていただき、玉串奉奠は橋本支部長、森日本山岳会会長、神崎日本山岳協会会長、高原日本山岳会常務理事、阿部信一新潟県山岳協会会長、今田明子日本山岳会総務委員長をはじめ十数名により厳粛に執り行なわれた。その後お酒を好まれた高頭翁に対し、軽登山靴倶楽部小泉芳枝氏、越後支部原田敬子氏(埼玉県狭山市)、越後支部佐竹秀子氏(福島県会津若松市)ら女性会員からのご献酒を行なっていた。

一連の式典終了後、寿像碑をバックに全員で記念撮影(写真1)を行ない、暑さが厳しかった場所を高頭翁寿像前から日陰になっているあずまやに移動し、15時より森会長から「祝日山の日制定と今後の活動」という内容で記念講演をしていただいた。森会長の講演要旨は「日本山岳会の創設から来年で110周年となるが、高頭翁が山岳会の財政基盤を確立していたが現在日本山岳会がある。」

その日本山岳会が中心になり、山岳5団体と共に運動を続けてき

た「山の日」が、今年5月に国会を通過し法律として制定され、再来年より8月11日に施行されることとなった。」と経緯を紹介していた。そして明日には、高頭翁の墓前に「山の日制定」の報告をすることができると述べられた。

その後、お神酒をいただきながら一時の懇親会となり、越後の地酒を味わいながらの歓談となった。16時ごろより弥彦山頂の奥ノ院へ移動を始め、山頂御神廟前にて開催される新潟県登山祭に参加した。17時より弥彦神社神官による「登山安全祈願祭および松明登山清め祓い」が執り行なわれ、ここでも神崎日本山岳協会会長、森日本山岳



高頭翁の墓(写真2)

会会長、新潟県山岳協会、並びに傘下の山岳会代表による玉串拝礼が行なわれた。

17時30分より山頂祭記念講演として、神崎日本山岳協会会長から「地球の3極(北極、南極、エベレスト)」という内容で記念講演をしていただいた。神崎会長の講演要旨は、「北極は1909年4月6日アメリカ隊(ペアリー)が到達、南極は1911年12月14日ノルウェー隊(アムンゼン)が到達、エベレストは1953年5月29日英国隊(ヒラリーとテンジン)が登頂した。この地球の3極制覇を単独で目指した男がおり、それが植村直己である。彼がマッキンリーで亡



記念石碑前で(写真3)

くなってから、今年で30年の節目となる。

私は、1970年の日本山岳会エベレスト隊で植村氏と一緒にあつた。1978年の北極点遠征では、母校大隊が4月28日到達し、植村氏は翌29日の到達となった。植村氏は、その後1984年にアルゼンチンから南極を目指そうとしたが、フォークランド紛争により断念し、マッキンレーに向かい消息を絶った。」と、地球の3極の歴史と植村直己氏との関係について興味あるお話をしていた。

18時20分より参加者は、それぞれ弥彦山頂から松明を灯して、麓の弥彦神社を目指して下山を開始する。20時に弥彦神社社殿にて松明行進隊のお祓いを受け、ボーイスカウト鼓笛隊の先導の下、約200人強の男女岳人により松明を掲げて市中行進を開始した。多くの参拝者で賑わう神社参道を出発し、幻想なる松明の火をかざしながらの行進に対し、沿道のお神輿部隊も一時停止して拍手をもって迎えてくれた。また、ちょうど夜空に舞い上がるスターマインの花火を見ながらの楽しい時間帯であった。弥彦駅まで約1km強の行進

を終え、松明を納めて20時45分に終了した。さらに、21時より宿舎にて、森会長と高原常務理事を囲んで越後支部会員有志との懇親会を催し、親睦を深めていただいた。翌26日は、折しもフェーン現象で朝から急激に気温が上昇し始め、汗が噴き出るような暑い日となった。森会長と高原常務理事には、長岡市深沢町の高頭家菩提寺である大滝山正林寺にご足労いただき、本間宏之副支部長の案内で高頭翁の墓参(写真2)をされた。また、近くにあった高頭家の広大な住居跡は、現在長岡市の管理で公園として整備されて、大きな石碑が建立されており、その記念石碑前で記念撮影(写真3)を行なった。その後、長岡駅までお送りし、無事帰京された。

なお、神崎日山協会長と軽登山靴倶楽部の一行は、越後支部メンバー(山崎幸和顧問、小山一夫事業委員長、山田智子委員)の案内で、角田山登山に向かわれたが、フェーン現象の厳しい暑さのため、途中でコース変更して下山されたとのことである。

今回の高頭祭に遠路駆けつけていただいた日本山岳会森会長、高

原常務理事、さらに日本山岳協会
神崎会長、軽登山倶楽部今田事務
局長をはじめとするメンバーの
方々に、紙面を借りて感謝を申し
上げます。

(桐生恒治)

山梨支部

第10回山の博覧会

日本山岳会創立100周年と山
梨支部創立60周年を記念して、山
梨支部として1995年7月に始
めた「山の博覧会」は以後毎年実
施し、今回で10回目。去る7月5
日(土)に甲府市の山梨学院メモ
リアルホールで460名の方が集ま
って開催された。

最初に山梨県甲州市の名刹、放
光寺住職・清雲俊雄氏が修験者の
いで立ちで、頭に「頭巾」、錫杖を
手にして法螺貝の鳴り響く中を演
台に登場するという演出効果満点



講演した清雲俊雄氏

で現れた。「登拝修行 山で神仏
を感じる時」という演題で実際の
山伏修行の映像を映しながら険し
い山中での仏教修行について分か
りやすい丁寧な口調で講演された。
鳴り止まぬ拍手と法螺貝の響きが
会場を包んだ。

次に永年にわたって富士山青木
ヶ原樹海取材してきた山梨日日
新聞社の報道企画グループの記者
前島文彦氏による「青木ヶ原 蒼
き千年の森」と題する講演。これも
また数多の映像や分析データを交
えて多方面にわたった熱の入った講
演であった。青木ヶ原樹海は貞観
噴火(西暦864〜866年)の溶
岩流で出現した台地にできた森で、
その面積は30km²(東京山の手線内
の面積のほぼ半分)、1100年余
経過のまだ若い樹林である。日本
にのみ生育する榊や天然の檜が9
割を占める特異な植生の場所でも
ある。そして負の問題。自殺の名
所として世界的に有名な場所とし
て海外でも紹介されている(例え
ばウィキペディア英語版)。また、
松本清張の『波の塔』で国内でも
有名になった。講演後たぐさんの
質問が出て、講演会進行に困るほ
どの聴衆の反応であった。



「山の博覧会」会場

最後に山の日制定でお力添えを
いただいた作曲家・船村徹氏によ
る「山の日と男の友情を語る」とい
う講演。同氏作成・出演の映像の
後、穏やかな口調でしみじみとし
た話で締めくくられた。

今回、山の博覧会企画にあたり
日本山岳会のホームページやチャ
シなどで「山博ファイナル 感謝
を込めて」と表示した。どうしてや
めるのか? といった問い合わせ
などが色々な方面からあった。そ
こで急遽、開催当日聴衆の方々に
アンケートをお願いした。引き続
き継続をして欲しいといった意見
が相当ある。支部としては会員の
意見なども改めて聴取し、今後の

対応を慎重に検討してゆきたい。
ただ、マンネリズムは避けたいと
考える。

(北原孝浩)

埼玉支部

支部創立5周年記念

ヒマラヤ・チュル―最東峰
登頂とトレッキング遠征隊
報告

今回の遠征は、埼玉支部創立5
周年記念事業ということで、支部
が4年余で築き上げてきたチーム
ワーク、毎月の山行で培った体力、登
山技術を踏まえて、ヒマラヤの6
000m峰登頂を目指す登山隊と
アンナプルナ内院とエベレスト街
道を繋げた23日間の長距離トレッキ
ングにチャレンジするトレッキン
グ隊という計画である。遠征隊は、
登山隊9名、トレッキング隊5名
の合計14名で催行された。また、今
回は埼玉支部の社会貢献活動の一
環として、ネパールの子どもたち
を訪問し文具をプレゼントした。
文具は、かねて交流のある立正大
学(熊谷キャンパス)のご好意でた
くさんのご寄贈をいただいた。

登山隊は、後わずかのところで
山頂を踏むことができず、トレッ



最高到達点での記念撮影

キング隊も、ナムチエまで達しながらエベレストの雄姿を望むことが叶わないなど、いささか残念な点もあったが、神様のちよつとした意地悪だったのだろう。しかし、参加者全員が夢にチャレンジし、頑張つて、それぞれに夢を掴んだのではないかと思う。

登山隊報告

4月21日、カトマンズ出発の朝、道路工事のためベシサルから車で3時間先のチャムジェまでしか車で入れないとのバッドニュース。チャムジェから徒歩でチャメまで3日かかってしまった。おまけに2日目のダンキューで異常低温に

見舞われ、隊員とシェルパの何人かが風邪をひく。特に古川隊長とダナル・サーダーが重症。結局、2人はBCに上がれず登山には不参加となつてしまった。それでも残りの8名は順調にカルカBCACと高度を上げ、4月30日にはほぼ予定どおりAC5300mに集結した。全員がパルスオキシメーター数値も90前後を維持し、高度障害は全くなかった。

登頂日は2:00AM出発である。急な雪壁をフィックスロープとアッセンダーを頼りにぐんぐん登る、アタックの登りは本当にきつい。7時ごろには推定5840m地点に到達。しかし、ここでルート工作に先行したシェルパが戻り、この先はブルーアイス状態で氷が硬くアイゼンが効かない。極めて困難で危険である。これ以上安全に登ることは不可能である、とのこと。高橋隊長代行は、シェルパの判断を受けざるを得ないし、一部の隊員を登らせるためにパーティを分けることは、より危険な下山を考えると選択できないと考え、この地点で登頂を断念し、全員で下山することとした。

下山は長い懸垂下降の連続で時

間もかかり、途中で登高を断念し先行下山していた隊員がヒドンクレバスに転落するなどのアクシデントもあり、15時に一同かなりへと状態でBCに帰着した。ろくに食事もとれない13時間の行動であつた。下山後は、マナンで1日休養し、再び5416mのトロンプ・パス越えに挑戦した。パス越えの日は3:30AM出発し、最後のメンバーがロッジに着いたのは14:30。11時間の行動となつた。高度順化済みとはいえ、やはり5000mを超えた登りはきつかった。乾いた大地を毎日ひたすら歩き、最後にはジヨムソンへの河原の道で、目も開けられないような烈風に煽られるおまけもあった。しかし、マナスルに始まり、アンナプルナ山群を飽きるほど眺め、そして最後にダウラギリの雄姿を目の当たりにすることができた。まさに、この世のものとは思えない景色の連続であつた。ガイド任せのツアーとは違い、毎日の行動やシェルパとのコミュニケーションなど苦労することも多かったが、それだけに充実した23日間であつた。

(高橋努)

図書受入報告(2014年8月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
富山県山岳連盟(編)	富山の百山	260p/21cm	北日本新聞社	2014	出版社寄贈
佐々木 亨	山麓から登る世界文化遺産富士山 : 富士山の古道&登頂ルート	120p/21cm	山と溪谷社	2014	出版社寄贈
深田久弥	名もなき山へ	318p/20cm	幻戯書房	2014	出版社寄贈
全日本山岳写真協会(編)	山稜2014 : 2014年全日本山岳写真展作品集(撮影地図付)	186p/22cm	全日本山岳写真協会	2014	発行者寄贈
根深 誠	白神山地マタギ伝 : 鈴木忠勝の生涯	274p/20cm	七つ森書館	2014	著者寄贈
Sean Isaac (ed.)	The Canadian Alpine Journal Vol.97 (2014)	160p/28cm	A. C. of Canada	2014	発行者寄贈
Jenny Paterson (ed.)	The Journal of the Mountain Club of South Africa No.115 (2012)	166p/24cm	M. C. of South Africa	2013	発行者寄贈



図書紹介

菊地俊朗著

『ウェストンが来る前から、
山はそこにあった』



2014年8月
信濃毎日新聞社刊
四六判278頁
定価1300円+税

山岳ジャーナリストとして長年にわたり、取材活動や情報収集に携わってきた著者が、地元目線で書き上げた。通説となっている「近代登山」の定義や、「近代登山の父」とされるW・ウェストンから日本の登山は始まった」という定説に違和感を抱き、なおざりにされがちな山岳の裾野の広さを訴える。著者は以前に著した『北アルプスこの百年』（2003年、文藝春秋）でも日本の登山史で言及されない経済的・社会的事情や宗教登

山などの補強があつてこそ、登山史の完成があることを主張した。本書にもその考え方は貫かれていゝ。前著が北アルプスの山小屋などを中心に論述されたのに対し、さらに南・中央アルプスなどを含めた広範な山城の、より多角的な視点から説き起こしている。それらの視点は8つの章で構成され、事例として取り上げられている。すなわち、学校登山、山街道・乗越・湯道、穂高と甲斐駒を代表とする開山伝承、「山」の虚像を演出した小島鳥水と新田次郎、山の事業家としての信濃屋庄三郎と大倉喜八郎、山の既得権・入会と水利、山人評伝の各項目がそれぞれであり、最後の「山学彩々」で日本人と富士山の関わりや三角点のことなど話題の数々を語る。豊富な情報とジャーナリストならではの鋭い識見が散りばめられて、思わず興

味の淵に引きずり込まれていく。ここで槍ヶ岳を例に考える。一般に明治35（1902）年の小島鳥水と岡野金次郎による槍ヶ岳登山は、日本人による画期的な近代登山の幕開けとされる。ところが、鳥水らは山頂に三角測量の跡を認める。彼らの1ヶ月前に測量士たちが命懸けで撰点・規標作業を行なっていたのだ。下山後、10年前にウェストンが槍へ登っていることを知った。しかし、ウェストンより15年も前に同じ英人W・ガウランドが槍へ登っていた事実があり、もし趣味が目的の登山を近代登山というならば、ガウランドこそ近代登山の祖であつた。ウェストンも鳥水もその著作による自己アピールが大きな影響を与えた。さらにそれ以前の文政年間に日本人が登っていた。播隆上人が未踏の槍ヶ岳を開山するため数度登攀していたのである。それらを支えた山人たちがいた。そのような人々が通った上高地や徳本峠は古くから林業など生業の場であり通路でもあつた。山に関わった人々の味わった感動や達成感は共通なものであつたのではない。岩と氷河に鎧われて人の接近を拒んだ

ヨーロッパアルプスとは違って、日本の登山には古くから多くの人々の関わりがあつた。

本書の意図は「はじめに」の最後にある「登山行為の裾野の広さと日本独自の近代登山の狭量な実態をご理解いただければ」という著者の願ひに集約される。従来の登山史観に一石を投じる問いかけの一書である。
(砂田定夫)

五十嶋晃著
『田部重治の登山と英文学』



2014年8月
五十嶋商事
A5判 445頁
定価2500円+税

田部重治生誕130年となる2014年8月4日に合わせて『田部重治の登山と英文学』が発刊された。日本アルプスや秩父の開拓者として、また、山岳雑誌名にもなった『山と溪谷』をはじめとする数々の山岳文学を著したことで名高い田部だが、英文学者としても高名である。

本書は、田部の足跡をたどりながら、多くの人々との交流や田部

の人柄が分かるエピソード、親交があった人たちからの寄稿などを盛り込み、第一部を五十嶋一晃氏の論考、第二部を田部重治研究会による英文学に関する論考により構成している。田部と同郷であり法政大学の後輩でもある著者は、田部の生涯について忠実に著すことを使命としているように感じるところで、事実確認を重ねて、複眼的な視点で田部の発言や行動、文章を繙き、しっかりと自分の論理を考察しているところはさすがである。

全体的には、初めて田部の登山や文学に触れる人にとってはやや難しい内容とも言えるが、分かりやすい項目立てや田部の著書からの引用と解説は読み手にとって易しいので、じっくり付き合ってみよう。また、略年譜は、田部の年齢、主な事柄、著書について、横軸と縦軸が分かりやすく整理されており、明治、大正、そして昭和へと移りゆく時代を想像しながら日本アルプスや秩父の山々の開拓を進めていた田部の登山や自然体な生涯について触れることができる。

昨今の百名山ブームの中で、多くの山頂を極める登山活動を否定するつもりはないが、山を思う感

性を高め、さらなる山の親しみ方を得るためにもこの一冊を手にとってほしいと思う。ちなみに、若い会員のために付け加えると、田部重治は「たなべじゅうじ」である。

(大久保春美)

(購入は、太郎平小屋公式HPを検索)

酒匂秀介ほか編

『スキー山岳部の歴史』



2014年5月
東京大学山の会
A5判142頁

伝統ある東京大学スキー山岳部

(Tokyo University Ski Alpine Club、略称TUSAC)の歴史を、OB団体「東京大学山の会」のメンバーがまとめたもの。近代に挑戦的登山を目指したその活動内容は日本山岳史の一部ともいえる。

TUSACの前身である東京帝国大学スキー山岳部は、1923年に発足した。「スキー山岳部」という名称は、スキーが日本に導入された当初、雪山登山と結び付けて考えられたために付けられたもので、当時は同じ名称の部も多かったそう。本書によれば、部員

は、すでに旧制高校時代に岩壁登攀や未開拓ルートに挑戦した経験を持った若者たちで、一高旅行部出身者に偏らず、仙台の二高、金沢の四高、岩登りに強い甲南、成蹊などの高校出身者らが全国から集まった。高揚感を持って入部した若者たちは、漲る気力と体力を部活動に向けたに違いない。部では山に関する冊子の出版なども行なっており、上下関係に縛られることなく自由に発言できる明澄な雰囲気があったようだ。

高みを目指す部員らの目は、ごく自然に海外登山に向けられた。ヒマラヤを念頭に、1932年には、朝鮮外金剛・集仙峰の針峰群に初登し、大学山岳部の海外遠征に弾みをつける。その後も南千島国後島チャチャヌプリ遠征を行なうなどするが、徐々に戦争の足音が大きくなり、生徒動員によって、TUSACは事実上の活動停止に追い込まれた。命の下った部員たちは、東大乗鞍寮「銀鞍荘」での再会を胸に出陣したという。

戦後は登山未経験の新入部員が普通になったが、63年のバルトロ・カンリ、80年代のシヴリンやK7、エル・キャピタンの岩壁登攀など、

輝かしい業績を残している。

本書には、TUSACの歴史を概観する原稿や年表のほか、「東大山の会」メンバーによる座談会も収録されている。座談会では、TUSACによるバルトロ・カンリ登山を中心に、当時の日本山岳界や、京都大学など他大学の海外遠征にも触れられており、時代の中でTUSACがどのように活動してきたのかが分かる。

大学山岳部の低迷が続いている今だからなお、情熱的に山を目指すTUSACの活動史が眩しく映った。

(松原梓)

Climbing&Medicine・64

登山と睡眠薬

村上和子

「夕食後の午後6時に寝て4時間後の0時に起床、そして頂上アタックへ出発!!」という登山の場面には、いかにここで睡眠を上手にとるかが成功へのカギのひとつになるのではないだろうか。

体力が十分残っていれば気にすることもないかもしれない。しかし高所という条件は甘くはない。

長期登山においても眠ることができないという場面が続くと、眠れないという恐怖心や不安、ストレスが生じ、思うように自分の力を発揮することができないかもしれない。それでは、と前もって病院に行き医師に睡眠薬を処方してもらってから、山行に出発すれば良いのでは……と考えるが、ここで大きな問題が生じる。

睡眠薬は超短時間型、短時間型、中間型、長時間型に分類される。前述した登山の場面では4時間で目を覚ましたいのだから、超短時間を飲めば良いと思ってしまうがちであるが、そんなに単純な問題ではない。睡眠薬の副作用には呼吸抑制・筋弛緩作用があるのだ。高所ではこの呼吸抑制が大きな問題である。それに超短時間型には中途覚醒時の健忘症という困った副作用もあるのだ。これは途中で起こさ

れた場合、その起きていたときの行動を全く覚えていないという副作用である。

それでは、登山に安心して服用できる睡眠薬はあるのだろうか。それは、睡眠薬そのものではなく抗アレルギー剤の服用が良いと筆者は考える。近年開発された眠気の少ない抗アレルギー剤ではなく、眠気の副作用が強い昔の抗アレルギー剤の利用である。つまり強い眠気という副作用を利用した飲み方だ。実際、町の薬局・ドラッグストアで医師の指示がなくても購入できる薬では、抗アレルギー剤である抗ヒスタミン剤が催眠鎮静薬として販売されている。ただ、個人の薬の感受性は微妙に異なるので必ず試してから利用したい。

最後に、筆者が高所登山で何を使用したかを参考に記しておきたいと思う。もちろん眠気の副作用が強い抗アレルギー剤を選んだが、鼻炎用の点鼻薬を利用した。これは鼻腔粘膜より直接吸収させるので即効性があり、かつ外用薬なので全身性副作用が少ないので選んだのだ。眠るのに時間がかかった、眠れたが起きたら全身がだるいでは、台無しである。筆者は薬の感受性が強いので、外用薬が利用できたという体験談である。

抗アレルギー剤はすべての人に使えるものではなく、使ってはいけない場合もあるので、薬の選択は必ず医師に相談していただきたいと思う。

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会
<http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>

■8月の理事会は夏休みのため休会でした。

ルイム日誌 8月

28日	山遊会	公益法人運営委員会	01会
27日	自然保護委員会	麗山会	
26日	デジタルメディア委員		
25日	YOUTH CLUB		
22日	爽会	山の自然学研究会	
20日	休山会	青年部	つくも会
19日	スキークラブ		
18日	総務委員会	スケッチクラブ	
7日	山岳地理クラブ		
6日	YOUTH CLUB		
5日	常務理事会	集会委員会	
4日	スケッチクラブ		
2日	自然保護委員会	三水会	
1日	自然保護委員会	YOUTH CLUB	

会務報告

会員異動(8月分)

8月来至者 271名

物故

尾崎徳郎	(4170)	14・7・25
國分恒司郎	(4408)	13・5・2
若浦義弘	(5271)	14・8・5
本田卯太郎	(5698)	14・8・15
柴田初子	(7682)	14・8・5
原田直英	(9090)	14・6・9
吉田恭平	(14484)	14・8・26
清水佐二郎	(7955)	岩手

訂正

『山』8月(831)号10頁、JAC会章について「佐藤久一朗さんのデザインになると聞いています」と書きましたが、関塚貞亨会員から武田久吉名誉会員の考案であるとのご指摘がありましたので、訂正いたします。

芳野菊子

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N◆探検家・角幡唯介さんが語る―
「探検」と「本」 図書委員会

『空白の五マイル』『雪男は向こうからやって来た』『アグルーカの行方』、そして共著の『地図のない場所ので眠りたい』。若い感性で、次々に新しい「探検」の世界を切り開き、読者を魅了する角幡唯介さんに、著書について、はたまた登山や探検の本について、ノンフィクションを書くという行為について、思うところを語っていただきます。さて、気になる次のテーマについては語ってもらえるでしょうか。

日時 10月3日(金)19時～

会場 日本山岳会104号室
問合 三好まき子TEL 090-8019-8601
✉ 34mm@mbenifty.com◆講演会のお知らせ 緑爽会
「ダライ・ラマの親衛隊長 上州

人冒険家 矢島保治郎

明治時代の終りごろ、河口慧海らに次いでヒマラヤの峠を越え、チベットに潜入し、やがて時のダライ・ラマ13世の親衛隊長にまで登り詰めた一代の冒険家の物語を同じ郷土出身の著名なアルピニスト・八木原罔明氏が語ります。

日時 10月24日(金)18時～

講師 八木原罔明氏(群馬支部)
場所 日本山岳会104号室定員 先着30名
申込 松本恒廣TEL & FAX 03-3332-6128 92
✉ tomuraushi10@yahoo.co.jp

◆全国ボランティア登山(障害者支援登山)情報交換会開催のご案内

東海支部では、今月初の試みとして、全国ボランティア登山(障害者支援登山)情報交換会を開催いたします。

主旨…視覚障害者支援登山(ブライ

ンド登山)を広く知っていただき、全国に普及するきっかけになればという思いから、他支部の方々と、ブラインド登山以外の各種支援登山も含め情報交換会を行なう。

日時…平成26年11月8日(土)・9日

(日) 集合時間は8日15時を予定。

場所…東海支部ルームおよび東海地方の山(猿投山を予定)

内容…11月8日(土)東海支部ルームにて、情報交換会と懇親会 11月

9日(日)バスで移動、視覚障害者支援登山を一緒に体験していただく。

費用…参加者負担分…名古屋までの往復交通費、宿泊費、懇親会費等は実費負担。

支援登山参加費…バス代込みで2000円

参加…障害者支援登山に興味のある方はどなたでも。

問合せ…東海支部ボランティア委員会 前田隆久へメールにて

✉ madaig@gmail.com

◆講演会 山岳遭難は誰にも起きる 東京多摩支部

日時…10月27日(月)18時30分

講師…羽根田治氏

会場…立川市女性総合センターアイムホール

日本山岳会蔵資料紹介 No.14

[資産番号] フィルム管理番号35mm # 1、
 16mm # 1~80 (うち欠番7巻)
[資料名] 映像資料: 35mmおよび16mm映画フィルム
[部門名] 映画フィルム
[寄贈者] 別宮貞俊、三田幸夫、鈴木正俊、
 高橋照、風見武秀、羽田栄治ほか
[受入日] 不明



「ナンダコット征服」35mmフィルム



「マナスルに立つ」16mmフィルム



「黒部の秋」16mmフィルム

本会先輩たちの国内・海外登山の記録、および先輩たちがその制作に直接携わった映画フィルムを数多く所蔵している。50年以上経過しているものが多く、フィルムロールは物理的(フィルムベースの変形と脆弱化、画像および磁気音声記録部分のくっつき)、化学的(銀または色素画像の変退色、フィルムベースの分解、いわゆるビネガーシンドローム)な劣化を起こして、映写機での映写ができないものもあるが、主要なフィルムは過去にビデオテープに変換され、また、近年DVDに再変換したものもあるので、昔の映画をTVで鑑賞することができる。

主なものを列挙する。数字はフィルム管理番号(カッコ内は制作年、C: カラー作品、V: テレシネ変換VHS、D: 再変換DVD)。一部フィルムは所在不明ながらVHSとして残っているものもある。35mm: 1. ナンダコット征服(1936、V D)。以下16mm: 2. マナスルに立つ(1975、C V D)、5. エベレストへの道総集編(1970、C V D)、7. ナンダデヴィ縦走(1976、C V D)、10. チョモランマ北壁隊(1980、C V D)、13. 黒部の秋(1929、V D)、15. 真川より黒部川・剣沢入り(1931・1933、V D)、19. 新高山遠征(1939)、22. ビッグホワイトピーク初登頂(1962、C V D)、65. 冬のロータン峠 パンジャム・ヒマラヤ(1930、V)、69. ジュガール・ヒマール遠征の記録 東海岳連(1960)、72. 第1次マナスル登山記録(1953)、73. Epic of Everest 1924 (1924、V D)。「所蔵映画フィルム一覧」を見たい会員は下記メールアドレスにご連絡ください。

なお、日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→資料映像委員会へアクセスすると、「会報ページそのもの」を「拡大およびカラー」で見ることができます。活用ください。また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、次までお寄せください。✉jacshiryo102@jac.or.jp (資料映像委員会)

日本山岳会会報 山 832号

2014年(平成26年)9月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 森 武昭
 編集人 柏 澄子
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社

●追悼にあるように、村井葵さんが7月上旬に亡くなった。かつて会報編集人も務めた方。私にとつては学生時代に登山の遊びや山の楽しさを教えてくださった恩師でもあった。亡くなる間際まで、書くことと山への情熱があふれんばかりだったと聞いた。

(柏 澄子)

◆編集後記◆

◆山を描く 中村好至恵展
 期日…9月13日(日)~10月13日(月)
 場所…日野春アルプ美術館(北杜市長坂町) ☎0551-321-6325、090-5194-6989
 開館10:00~16:00 入館料500円 原則火・水曜日休館

申込…小山義雄 ☎arukutama@yahoo.co.jp 締切…10月15日(水)